



2012年 3月号

滑稽俳句協会会長 八木 健氏 に聞く 41

紅緑偏「滑稽俳句集」を読み解く 33 (聞き手 高橋素子)

高橋 > 前回のインタビューでは、「今、現在を生きている俳人も、俳人の仮面を脱いで『すっぴん』の自身をさらけ出して句にしたい」と教えて戴きましたね。夏目漱石は、胃潰瘍を患って生死の境をさまよい、絶食の末に許された粥の味に、

腸(はらわた)に春滴るや粥の味 漱石

と、生きる喜びを生々しく句に詠んだということですが、正岡子規の絶筆糸瓜三句も、死ぬ寸前の自分を冷静に客観視した絶妙な滑稽句とも言えますね。

会長 > 「俳諧の連歌」の発句が独立して、後に「俳句」と名付けられ、その後、写生句、境涯句、人生探求など様々な俳句が登場しましたが、煎じつめれば、精神の自分史ですから、子規の絶筆三句は自分史の仕上げにふさわしい句ですね。この句は自身を笑うことができた究極の滑稽句でしょう。

高橋 > 本当にそうですね。もっとそのお話を聞いていたのですが、本題に入らせて戴きますね。本日は前回に引き続き、紅緑の「滑稽俳句集」、秋の人事の部です。紅緑の「案山子」の句が少し残っていますので、その句のご解説からよろしくお願い致します。

うしろ前に顔をかきたる案山子かな 紅緑

太刀佩びて弓持てまさにかかしかな 紅緑

我鳥をまもる隣のかかしかな 紅緑

ふんどしもなくして事済むかかしかな 紅緑

紅緑も案山子が大好きだった様ですね。面白くて親しみのもてる季語ですものね。
ご説明よろしくお願い致します。

会長 > 「うしろ前に顔を…」、

うしろ前にということは、表にも裏にもということですね。四方八方を見張るわけですね。

「太刀佩びて弓持で…」、

案山子の分際で刀をさしているのは、それだけで可笑しいですね。どうせ竹の棒でしょうが…。

「我畠をまもる隣の…」、

あちらの隣の案山子が我が畠を守ってくれる、ありがたい話です。こちらは横着で案山子を立てない。

「ふんどしもなくして…」、

案山子だから、ふんどしは不要。言われてみればその通りです。

高橋 > 案山子が好んで句に詠まれるのは、やはり人間臭いところ、哀しさや可笑しさを併せ持つから…と前回ご解説戴きましたが、本当にそうですね。では、次の句に参ります。季語は「田刈」と「新酒」です。田刈は稲刈りのことですね。

草かりのおとなに成て田刈かな 也有

案山子どの世話で有たと田刈哉 也有

新酒賣る亭主の髯や水滸傳 子規

会長 > 「草かりのおとなに…」、

草刈りは子どもがしているでしょう。大人になれば稲刈りをするということですね。

「案山子どの世話で…」、

稲刈りを始めるにあたり、案山子に「ご苦労さま」と挨拶しているわけで、なんとなく可笑しいですね。

「新酒賣る亭主の髯や…」、

新酒を売る亭主の髯が水滸傳の登場人物に似ているというのでしょうか。

高橋 > 有難うございます。次の季語は「砧」です。砧の説明に「キヌイタ(衣板)の約。槌で布を打ちやわらげ、つやを出すのに用いる木または石の台。また、それを打つこと。女の秋・冬の夜なべ仕事とされた などと、書かれていますが、昔の女性は本当に大変だった様ですね。句に参ります。

砧うつ相手にわろし左利き 幸水

遠近をちこちとうつ砧かな 蕪村

指打てしばらくとやむ砧かな 几董

行灯を畑に置いて砧かな 一茶

から衣下手にうたせて寝入けり 大江丸

会長 > 「砧うつ相手に…」、

「わろし」は「すみません」というわけです。砧は二人で向かい合って打ったのでしょう。相方が左利きだと、ぶつかってしまいますからね。相手の手を叩くことになります。

「遠近をちこちと…」、

砧は万遍なく打たねばなりません。遠くも近くも打つ。遠近と書いて「をちこち」と読むところから、砧を打つ音を「をちこち」と洒落たのです。ここで一句、
をちこちが分からぬこちこち頭かな 健

「指打てしばらくと…」、

誤って「指」を打ってしまったらしい。「しばらくとやむ」は「音が止む」ということで離れている作者は、音が止んだのは「指を打ったのだろう」と想像しているのだしょう。

「行灯を畑に置いて…」、

この砧は稲や雑穀の穂を打って実を取り出す作業でしょう。夜なべですね。

「から衣下手にうたせて…」、

砧うちは退屈なので、下手な、つまり未熟者相手に打っていたら、ついうとうとしてしまったというものです。

高橋 > 次の季語は、「鰯網」と「薬堀」です。薬堀は、秋に野山で薬草を掘り取ることで
すね。これで秋の人事の句はおわりです。

鰯網に鰯のかからぬを疑はず 虚子

おろかさや芋を掘居る薬堀 紅緑

会長 > 「鰯網に鰯の…」、

鰯網に鰯がかかるはずはないということで、それは疑う余地もないということです。この句ができた背景には「鰯がかかった」という椿事があったものと思われます。

「おろかさや芋を…」、

薬堀りは薬草を採ることなのに山芋、つまり、自然薯を採る人がいておろかなことと、嘲笑しているのです。

高橋 > 有難うございました。昔の生活の様子がよく分かりました。次は「秋詠物」の部に参りますが、なかなか解釈の難しいものが出て参ります。

「形影相弔う」という言葉がありますね。自分の形(からだ)と影とが互いに慰めうだけで、自分以外には人がいない孤独な様を言うそうですが、最初は「形影自相憐」ですね。「ひとりね」「鐵船が靈を祭る」「題妖もの」「悼移竹」「旅」「茶屋萬灯日ましにへりぬ」と、一茶の句まで続けてご解説下さいね。

形影自相憐

馬鹿づらに白き髭見ゆけさの秋 几董

ひとりね

七夕を笑ふて寝入るはしみ哉 牧童

鐵船が靈を祭る

我造る茄子の馬に乗て來よ 乙二

題妖もの

炭とりに早足のつく夜寒かな 召波

悼移竹

團栗や松子やひよんな夕哉 雨遠

旅

一人と帳面につく夜寒かな 一茶

茶屋萬灯日ましにへりぬ

両国の両方ともに夜寒かな 一茶

会長 > 形影自相憐 「馬鹿づらに白き髭…」、

自身の容貌を詠むということも自嘲的で俳諧味があります。作者は自身の容貌を馬鹿面としています。大気も澄んでいる立秋の朝、自身の顔に白い髭を見つけて「爺」になったものと慨嘆しているのです。

ひとりね 「七夕を笑ふて寝入る…」、

七夕祭りの笹竹に吊るされた短冊を読んで笑ったのでしょう。「端居」は縁台床机などに掛けて、涼むことです。端居の仲間もひとり去り二人去りして、自身は所在無く掛けていたところ眠ってしまったという、ちょっと淋しい句。

鐵船が靈を祭る 「我造る茄子の馬に…」、

茄子の馬は、盆迎えですね。茄子の馬をつくって嬉しかったのでしょう。この馬に乗ってきてくださいと呼びかけているのです。

題妖もの 「炭とりに早足のつく…」、

炭とりに「早足」で行くということ。夜寒がつのり、つい早足にということですね。

悼移竹 「團栗や松子やひよん…」、

雨遠は、江戸時代の俳人。追悼句だが通夜に集まった人々を詠んだのでしょう。どんぐり、松ぼっくり、いろんな顔の人と思ひもかけず出会ったのです。「ひよんな」は「ひよんの実」もかけてあるのでしょう。

旅 「一人と帳面につく…」、

宿帳に宿泊の人数「一人」と書き付けた。夜寒の旅籠です。一人旅は怪しまれ、敬遠されただけに「一人」と書くのはつらいことなのです。

茶屋萬灯日ましにへりぬ 「両国の両方ともに…」、

灯される萬灯が、日ごとに減ってゆくことに、寒さをひとしおに感じるということですね。

高橋 > 詠物は、なかなか面白いのですが、時には、前書きと句がしっくり合わなかったり、前書きから十七字の句の意味に迷ったり…。解釈がいろいろ難しくて困ることがあります。例えば、雨遠の「悼移竹」などは、追悼の句に団栗・松子しかも「ひよんの実」まで。これが通夜に集まった人々の顔かたちを詠んでいるとは…。会長は本当によくお分かりですね。それでは、最後に今日のまとめをお願い致します。

会長 > ♪田んぼ刈りiiiiii済めば案山子は倒されてえええ 畦にひとりねすること
にiiiiiii なれど その目は閉じることおお かなわず 哀れええええ団栗
まなこのおお ままなるよ♪